

視察先別報告 インドネシア

【技術協カプロジェクト】

市民警察活動 (POLMAS)全国展開プロジェクト

概要

インドネシア国家警察によるPOLMAS（インドネシア版コミュニティ警察活動）政策の推進を、①POLMAS活動の全国制度化、②教育訓練を通じた人材育成、③現場活動（鑑識や交番活動を含む）にかかる先行モデルであるブカシ警察署の機能強化を通じてのPOLMAS好事例の提示（国家警察本部へのフィードバック）、という3側面から支援する。

1 井上 佳奈子 日本がインドネシアの警察活動に支援を行い、警察署の仕組みや運用を改善しているというのは驚きであるし、日本ではあまり知られていないことであると思う。JICAの国際協力が分かりやすい箱もの支援や科学技術の提供だけでなく、幅広い分野に及んでいるということがうかがえる。女性交番を訪れ、その取り組みを聞かせていただくと、町をパトロールして安全を守り、市民とコミュニケーションをとって犯罪を抑止する、ということだった。実際に女性警察官の見回りに同行させてもらおうと、警察官はある家の男性を訪れ、すいぶん長い間親身に話をし、何か困ったことはないか確認していた。予想以上に親切だったので、パフォーマンスではないのかと正直思ったが、同行した佐々木警視は「いつもこんな感じですよ」と教えてくださったので驚いた。日本にはなかなかない、あるいは失われてしまった市民と警察のコミュニケーションの形がここにあると感じた。

2 貴名 貴洋 2002年にインドネシア国家警察の要請を受け開始した市民警察活動促進プロジェクト(POLMAS)は、5年ごとにプログラムが更新され現在フェーズ3に入っている。西ジャワ州ブカシ県とブカシ市を管轄するブカシ警察署をモデル警察署として、通信指令と犯罪鑑識を実施している。また、女性交番(Polsubsektor)の導入が進められるなど、市民に受け入れられやすい警察組織づくりが進められている。視察先の女性交番では、ムジ署長と実際のパトロール（模擬ではなく実演）に同行したが、集落の住民からも気さくに声をかけられるなど、警察官にありがちな偉そうな態度というものも一切なかった。また、住民カード記入を依頼する際にも、「字を書くのが苦手であれば代行します」と優しく対応するなど、「市民のための警察」として誠実な姿勢をもって信頼を得ていくという強い意志の表れを感じた。
このような成果は一朝一夕で現れるものではなく、13年間にわたる努力の賜物である。警察庁および全国警察本部からJICAを通して派遣されている日本の警察官や専門家の皆様に対し、これまでの不断的な努力に敬意を表したい。

3 國司 まゆ 丁度渡航の数週間前に、タイ王国でも日本の交番制度が技術移転されているという記事を新聞で目にしました。そこで初めて個人的にそうした隠れた輸出品が日本にあることを知りました。同様の活動を今回視察して、警察業務が15年前まで国軍の任務であったインドネシアで警察官になるということ、市民を守るということがこれからこの国で生きていく若者個々人のプライドになってくれるとよいな、と思いました。また現地で日本の警察庁から派遣されている岩手出身の佐々木氏がお父さんのように温かい目でこの若い独立70年の国を彼らしく育てていこうという思いが言動のあちこちに垣間見えて嬉しく思いました。バス移動の時にあちこちで、交番の前のかわいい警察官のイラスト看板を見ることができました。ますます広がることを望みます。

4 栗原 朋子 インドネシアの警察部門はもともと軍隊の一部で、市民へサービスするという概念はなかった。市民に寄り添ったサービスを提供できるようブカシ警察署を拠点とした「市民警察活動全国展開プロジェクト」が始まり、JICAは10年以上に渡り活動を支援している。日本のノウハウや技術を伝承し、この地区の活動を全国展開しようとしている。
活動概要の説明を受けたあと、鑑識方法の見学と交番訪問。仕組み作り、人材育成であるので、効果が見えるまでには何年もかかる。
交番を訪れたのち、実際のパトロールに同行。女性警察官2人の後ろをついて近隣の住民宅へ。暑い国なのでテラス部分にテーブルとソファが置いてあり、そこで住人と親しげに会話する様子に驚いた。世間話もしながら安全情報の交換もするという。住民も時々交番に顔を出すという。交番の連絡先が書いてあるシールを配るなど、地域住民と常につながりを持つ努力がなされている。何かあればすぐに相談できるという日頃のつながりが大切だと思った。日本も見習うべき。全国展開までには、さらなる人材の登用と長期の取り組みが必要。



Republic of Indonesia

5 佐藤 康仁 ジャカルタ市の東側に位置するプカシ市警察署にて、技術協力である市民警察活動（POLMAS）全国展開プロジェクトを視察した。普段あまりなじみのない警察活動の内部を見ることができ、興味深かった。日本からは警察庁からの専門家を中心に技術協力が行われている。プカシ地区は、日本企業が多く進出している地域であるが、この地域をモデルに市民警察活動を根付かせ、全国に広げつつある。市民警察官の巡回に同行し、市民警察官と市民との関係を見ることができた。国の発展とともに、警察制度も変わっていき、警察の意識も国民の意識も変化していることが実感できた。また、日本のソフト面での技術協力が、大きな成果をもたらしていることがよくわかった。インタビューでは、「箱物ではなく、仕組みや運用についての国際協力は成果が見えにくい」とのお話を伺ったが、確かに実際に警察と市民のやり取りを直接見ないと成果を実感するのは難しいと思った。

6 須磨 麻寿美 日本の警察が技術協力を13年にわたり行っていたことを今回初めて知った。鑑識技術の伝達において、インドネシア人の男性警察官は「鑑識の技術や応用方法などを日本人から学んでいる。現場にある血痕から指紋を割り出す技術など応用ができる」と、熱心に業務に取り組む姿から日本警察との信頼関係が伝わってきた。また、訪問先交番の管轄地域を案内してもらい、住民の声を聞く機会にも恵まれた。「警察官が巡回してくれるのはとてもありがたい。町が安全になる。バイク盗難が減った」などの声を聞き満足度が高いことが分かった。実際にその成果が地域の治安のよさに現れていた。日本警察が信頼関係の構築、意識改革、人材育成を丁寧に行って築き上げた、一朝一夕にはできない実績を実感できた。

7 手塚 大二郎 今のインドネシア警察では、市民と共に犯罪を発生前に防止・抑止し、人々が安心して暮らせる地域づくりを目指す取り組み「市民警察活動」が広がりを見せており、日本のODAがその一翼を担っている。日本の警察官がこの地で、現地警察官と直接コミュニケーションをとりながら、より良い警察システム、警察官の心得を伝えている。とはいえ、日本の警察が完全に完成されていて、すばらしいシステムとして成り立っているかといえば、必ずしもそうとは言えないだろう。現地警察に教え、システムが成熟していく過程で発生した事例が、日本の警察官達の学びにつながり、共に成長していくことができれば、何よりの「国際協力」だと思う。

8 宮原 昌宏 巡回に同行させていただき、警察官と住民との関係が非常に深く良好なことにとっても驚き、感銘を受けた。警察からの一方的なコミュニケーションではなく、対話を通じてエリア全体がどうすれば安心・安全になるのかを共に手を取り合っている印象だった。もともとこの活動のスタートは国軍の中にあった警察組織を、地域住民のための警察に進化させていくことが目的だったとのこと。2002年の活動開始当初から、大きな変革を実現したことが伺える。その活動の中には、国軍時代の過去の価値観をもった人々との軋轢や、組織風土など非常に困難なことを乗り越えてきた歴史があったと思う。この活動に長年関わってきた佐々木氏（警察庁警視）が熱く思いを語る姿から、長年のご苦勞を感じることができた。